

<p>解答形式 選択式・記述式・論述式</p> <p>分量・難易（前年比較） 分量（減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加） 難易（易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化）</p> <p>従来の大問 3 題の構成に、今年度から新たに歴史総合の大問 1 題が加わった。解答数は、昨年度の 34 個に対し、今年度は 37 個とやや増加し、そのうち 2 個が歴史総合の問題だった。歴史総合の問題を含め、資料・グラフの読み取りや論述の能力が求められる点で、思考力・表現力を求める経済学部の傾向通りといえる。やや易化した昨年度と比べても細かな知識を要する問題はさらに減少傾向にあるが、問題数がやや増えたこと、新科目の歴史総合の問題が加わったこと、グラフ問題が大幅に増加したことなどから、総合的に見て難易度は変化なしと判断した。</p> <p>出題の特徴や昨年との変更点 短い論述問題を多く出題する傾向や年代整序問題・資料問題の出題が経済学部の特徴で、今年度もすべてのパターンが出題された。また、地図問題・グラフ問題・図版問題の出題も特徴だが、昨年度出題された絵画の問題が、今年度は出題されなかった。一方、グラフ問題は、昨年度は 1 つであったが、今年度は 5 つ出題された。総じて難解な知識が要求されるわけではないものの、資料やデータをもとに知識を応用する能力が求められており、単なる史実の丸暗記では太刀打ちできない。</p> <p>新課程を踏まえた出題 大問 1 題が歴史総合の出題となった（経済学部の日本史と同じ問題）。また、経済学部は、以前から思考力・判断力を重視する出題を行ってきた。今年度はグラフ問題が大幅に増加し、解答に至る理由を論述させる問題も定着している。</p> <p>その他トピックス 今年度の大問 I は、世界の万国博覧会を取り上げることで、日本と世界を結びつけるテーマとなっているが、昨年度は日本を含む世界各地のル＝コルビュジエの建築作品、一昨年度は近代の日本とドイツの関係といったように、近年の経済学部の大問 I は、世界の中の日本という観点から出題される傾向にあり、経済学部の日本史と冒頭の文章を同じくしているうえに、今年度は 3 問が日本史と同一であった。今年度から始まった歴史総合の入試を待たずとも、経済学部では、世界史・日本史の垣根を越えた歴史学習が強く意識されてきたといえるだろう。</p>

<大問分析>

番号	形式	出題分野・テーマ	コメント（設問内容・答案作成上のポイントなど）	難易度
I	選択式 論述式	万国博覧会の歴史 (近代～現代)	問 2・問 3・問 4 は、いずれも基本知識を正確に覚えておけば書ける平易な論述問題。問 5. 空欄 β にゴム、空欄 δ にサイパンが入ることは容易だが、地図中で近接する両者を区別するのは難しい。問 6. 図の横軸の 1～3 の時期を特定する世界史側の最も大きな手掛かりは、アメリカの貿易収支が 20 世紀に入って最初に赤字に転落するのが 1971 年ということで、この史実からグラフを読み解くのが慶大経済学部の世界史の定番問題となっている。第 1 図・第 2 図が大阪万博の開催された 1970 年を含む 30 年であることも踏まえて第 2 図を見ると、1 の時期の 5 年目に初めてマイナスとなっており、これが 1971 年とわかる。なお、日本史を中心に学習している受験生なら、第 1 図で消費者物価指数前年比変化率が最も高くなっているのが 1974 年の狂乱物価であることから時期を特定できる。よって、1 の時期は 1967～76 年、2 の時期は 1977～86 年、3 の時期は 1987～1996 年。a はプラザ合意で 1985 年、b はリーマン＝ショックで 2008 年、c は第 1 次石油危機を機に開催された第 1 回先進国首脳会議で 1975 年。	標準

地歴公民(世界史) 慶應義塾大学 経済学部 2/3

II	選択式 記述式 論述式	国連気候変動枠組条約締約国会議 (近代～現代)	問7. ②bがバルフォア宣言、cがゾラの「私は弾劾する」とわかれば、正解を絞り込める。④グラフの「備考」の「折れ線グラフが途切れている年はデータが欠損」がヒントになっている。b・cにはデータの欠損があり、データが欠損するほどの混乱や危機が「bとcの政治情勢」にほかならない。bはアラブの春を機に2011年に起こったシリア内戦、cは2001年の同時多発テロ事件を機としたアメリカの圧力と2003年のイラク戦争及びその後の混乱、2014年頃から台頭したIS(イスラム国)による危機を想起したい。問9. bにはスリーマイル島が入るが、その地図中の位置はアメリカ本土というだけでは絞れず、ペンシルヴェニア州にあるという知識が必要で難問。なお、直前講習「早慶大世界史テスト[5]問3」は、問7①の論述問題とほぼ同じ内容であり、受験者には有利に働いたであろう。	標準
III	選択式 論述式	北アメリカ大陸の歴史 (近世～現代)	問11. ①②グラフは「到着した奴隷の数」なので、奴隷貿易について考える。ハイチは、18世紀末の黒人奴隷の反乱から独立運動が始まり1804年に独立を達成し、奴隷解放も実現したので、cと判断するのは容易だろう。ブラジルは、奴隷貿易・奴隷制を廃止したイギリスの圧力で1850年に奴隷貿易を廃止するので、aとなるが、これは細かい知識である。ブラジルは1888年の奴隷制廃止のほう知られているので、混乱した受験生もいたのではないかな。ただ、16世紀にポルトガル領となって以来、最大の奴隷受入地であることから、17世紀初めから突出しているaと見当をつけたい。問12. aは1957年のガーナ独立の際のスピーチと考えられる。bは「19世紀が終わろうとする今年」から1900年のスピーチ。cはアパルトヘイトと闘った人物が「釈放されたこの日」とあるので、南アフリカでアパルトヘイトが全廃される1991年に近い時期のスピーチと考えられる。問13. ①より、3の時期の綿花輸出額急落は南北戦争(1861～65年)が理由、②より、1の時期の金産出量急増はゴールドラッシュ(ピークは1849年)が理由だとわかれば、1の時期は1840年代、2の時期は1850年代、3の時期は1860年代、4の時期は1870年代、5の時期は1880年代と判断できる。aは門戸開放宣言で1899・1900年、bは中国人移民禁止法で1882年、cはホームステッド法で1862年、dはミズーリ協定で1820年。	やや難
IV	論述式	【歴史総合】 グラフと資料に基づく考察 (現代)	日本の米穀移入量・輸入量と前年生産量のグラフと、英領インドと仏領インドシナの米輸出状況に関する資料から読み取れることを考察する論述問題。問14・問15ともに、歴史の知識がなくても題意を満たす答案を作成することは可能。従来、経済学部の入試問題が、些末な知識よりも、思考力・応用力・読解力を重視し、さらにそれらを論述において表現する力を試してきた方向性と何ら異なるところはない。なお、文章4行目の「米穀」は「米穀」の誤りだろうか。	標準

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

地歴公民(世界史) 慶應義塾大学 経済学部 3/3

<学習対策>

経済学部では、年代整序問題や、出来事の起こった時期を年表中から選ばせる問題が多いため、歴史の流れや事項の前後関係、年号をしっかりと学習したい。経済学部では同じ年に起こった事項でも、その前後関係を判断して史実順に並べさせるような出題をするため、単に年号の数字を覚えるだけの学習では不十分である。また、現代の欧米史は経済学部の頻出テーマであるため、経済学部の性格を考慮した学習が望まれる。類似の資料やグラフがたびたび扱われているため、過去問を解くことは経済学部を受験するにあたって必須といえよう。新科目の歴史総合の問題に関しては、今年度は歴史的知識を要求されなかったが、来年度以降は未知数なので、当然、歴史総合の教科書の日本に関わる部分の学習を怠らないように。